

	仙台		仙台
	改題		
その七	北国の懐郷病者	その五	客引
その六		その四	家
皮膚		夜	猫
		食い物に 関して	

その一

「客引」

私はその時初めて仙台に行った。七月のことであった。東北大学のK先生のところに仕事がかきまわって、東京から引き移る前に、一度仙台という町を見ておきたいと思い、また出来ればその時下宿も探しておきたいと思って出掛けたのだった。私の仕事と言っても普通の勤め口とは違うが、兎に角ひとまず私の身の振り方が決まったので、仙台に発つ前に静岡県の田舎にいる母のところへ報告に行った。田舎へは夜行で行き、次の夜の夜行で帰京した。その次の夜すぐ上野を発つたので、夜行を三日続けた事になった。

見知らぬ土地へ来た緊張もあつて、非常に眠かつたにも関わらず、それでも間違はなく仙台に下りた。仙台駅の前に出て見ると、意外にも森とした感じを受けた。帝大のある東北第一の都会と思つて来た町は、田舎町のように物静かだった。広場から振り返ると、屋根の高い、くすぶつたカーキ色の木造の駅の建物が、暗い陰鬱な陰を廂ひさしの下に作つて立っていた。東京に始まる喧騒の最後の点とは到底思えない、沈んだ、見ていると心の中に何かしら重い澱みの出来て来るような暗い建物だった。それは七月の夏の空の下にあるよりも、むしろ暗い冬空の下にあるべきものだった。私の胸にこの建物に雪の降りしきる幻想が起つて来た。幻想の雪は私の今までの経験の中になく憂鬱な白いものだった。私は雪の非常に珍しい静岡県に育ち、またこれまで雪と言えば雪見を喜ぶような東京で暮して来た。私

は、この時はじめて世の中に憂鬱の雪、人の心を押さえつけるような雪のあることを知った。それがこの建物に降る雪だった。

私が吾に還って、七月の朝の太陽に気がついた時、思い掛けない男が馬鹿に馴れ馴れしい様子で、わたしの傍に立っていた。

「朝御飯如何ですか」

と男は、東北訛の強い言葉で言った。

「お安くお手軽に差し上げます。御案内しましょう」

わたしはこの男の顔を見て一寸思案した。三十四、五の、着流しの、顔と言っても、頭の髪の毛を妙に短く刈り上げている外は、不思議に何の特長も感じられないような男だった。彼は私が逡巡しゅんじゆんしているのを見ると、
「どうぞ」

と言って呑み込んだように先に立って歩きだした。彼の言葉は、いろはを違えて書かなければならないほどひどくはなかつたが、それでもその鼻にかかった発音が私の耳には非常に珍しく、朴訥ぼくとつにさえ感じられた。私は半ば信用して、不決断な気持のままその男に従った。彼は大通りをどんどん歩いて行った。なかなか駅の近くではなかつた。大分来て横町へ曲った。余り遠いので私は少し後悔しかけた。彼は通りから一寸引込んだ、遠くからはまるで見えない一軒の旅館にはいつて行った。「セントラル・ホテル」という看板が出ていた。このおかしな屋号は明治大正時代の名残か、考えようによつては妙に気負いの激しいような、或はこけ脅しのようなものだが、粗末な家造りの、しかも厚釜しいほど汚く古びた有様と比べると滑稽であつた。男はずかずかとその薄暗い玄関へ上がっていった。

私はすっかり気が重くなつて入口に立止つた。彼は私の様子を見ると、慌てて奥へ向つて何か叫んだ。帳場の陰から肥つた男が顔を出して彼と私を見た。帳場の男が玄関へ出て来て私をうながしているうちに、女中が飛んで来た。私は諦めて靴をぬいでぎしぎしいう階段を伝つて二階に上つた。

二階の隅の真暗な六畳の部屋へ通されて、自分の敷いている座布団より他には何も無いところで大分待たされた。案内した女中も注文をきかなかつた。私も判っている筈だと思つたので、そのまま黙つて待つていた。三十分ぐらいすると、女中がやつてきた。彼女は十人前もあるような大きな飯櫃めしびつをたつた一つ抱えて来て、それを黙つて座敷におくと、そのまま出て行つた。それから暫くの間、私は座敷の真ん中に首桶のように据えられたこの飯櫃をぼんやり見つめていた。やがて膳を持って来た。私は給仕を断つて、その首桶を引きよせて自分で飯を盛つた。この頃いう胚芽米とも違つた変に黄色い飯で、ぐしゃぐしゃとして、何時焚いたのかも冷たくなつていた。膳の上には刺身と、焼き海苔味噌汁漬物などがあつた。汚れた台拭布を思わせるような刺身には流石の私も手をつけ兼ねて、赤い海苔と塩辛い味噌汁で飯を食い出した。一杯目に飯を盛ろうとした時、驚いたことに、しゃもじに五寸ばかりの長さの藁屑が引つかかつて出て来た。まだ女の髪の毛でなくてよかつたが、この塩梅ではこの飯の不潔さが底知れないような気もして不安になつた。その一杯を無理に呑みこむようにして終えると、もう食えなかつた。お茶をのんですぐ手を叩いた。そして勘定書通りに一円五十銭払うと、早々にこの家を飛び出した。

私はそれから大学へ行つてK先生に逢い、私の仕事の相棒だという大兵肥満の男を紹介された。彼はこの朝食の話をしきくと、腹をゆすつて、カラカラと笑つた。

「やられたねえ」

と彼は私の不運、私が手もなくしてやられたのが満足だったのか、馬鹿に嬉しそうだった。そして仙台訛りというのが曲者で、東京から来た奴は大概一度は一杯食わされるのだと語った。彼も初めて仙台に来た時、土地が判らないので人力車に乗ったら、駅から眼と鼻の先にある知人の家へ行くのに、飛んでもない大回りをして妙な小路を走り回った揚句、一円近くの車代をとられた事があると言った。私にも判った。仙台はそんな点は、確かに都会なのだ。仙台訛りが東京から来る者に朴訥の錯覚を起させるにせよ、それは錯覚を起す方に罪がある。東京とは違った気持になって、あんな客引に引っ張られて行くのが間違いなのだ。あの宿屋にしろ、兎に角宿屋で飯を食うと言えば一円五十銭は当り前だし、またそれにしても出した食い物が非道ひどすぎると言っても、これは主として土地の気風や天産てんさんの量や質のせいだ、人間の好意とは無関係だ。だからこの場合は一杯食わされたとか、してやられたとか言うのとはまるで違う。しかしそう言っても、違う筈だと自分に言い聞かせては見るのだが、一方にはどうしても一杯食わされたという気持が残っていて抜けなかった。

私は相棒と仙台の町を歩き回った。平屋と古くさい埃をあびた門ばかり沢山あった。私達は私に適当な手頃な家を求めて、そういう門の中を覗いて歩いた。北国と言いながら、七月の太陽は、思い掛けない程激しかった。東京にも負けない街路の照り返しの強さに、私はすっかりうだった。仙台の道は舗装が少ないだけに、熱い埃がボクボクと深く暑苦しかった。死んだ友人のIは、生前、仙台が杜の都だというのが非常に気に入っていて、「俺は仙台へ行くんだ」と言いながら、よく仙台の絵葉書写真を眺めていた。その一枚に

は、何でも山らしいところに木が一杯あって、真ん中に橋があって、河は写真には見えな
いが、下の深い底の方を流れているだろうと思わせるような景色だった。しかし私は仙台
にこの時初めて来て、暗い建物や薄汚い家並みや街路の焼けた埃だけが眼について、木が
生えている町という印象は少しもなかった。考えて見れば、そんなところばかり見、そん
な見方ばかりするのが、そもそも私とIとの相違する点なのかも知れなかった。Iならば
恐らくもっと木のあるみずみずしいところを発見して帰っただろう。その非常な憧れを持
っていたIが高等学校時代に死んで、仙台など夢にも思わなかったこの私がここに来るよ
うになったのは、仙台にとっても小さいながら一つの不幸だったに違いない。

私達は家を探し草臥くたびれたと言うよりは、暑さに負けて切り上げた。下宿のことは相棒の
いる家の一間を当分融通して貰うことにきめて、私はその夜、四晩目の夜行に乗った。汽
車に乗り込んで座席に横になるや否や、私は上野まで死んだように眠りこけた。

仙台へはそれから間もなく引き移った。住んだ場所は駅の近所だったので、駅前の大通
りを絶えず往来した。駅前をいつもぶらぶらしていたあの客引にはそれからよく出会った。
彼は確かに私を覚えていた。しかし彼は私に気がつくど、それとなく顔をそむけるように
見えた。そんな素振りから、彼は私に対して何かしら面映いような気持ちを抱いているの
ではなかるうか、と私はひそかに想像したりした。しかし、これも私の何時もの思い過ご
しだったのかも知れない。

【新風土（小山書店） 昭和十四年五月号】